



とある悪女の

調教記録

気が付くと謎の部屋にいた。
身体は火照り、何かのクスリを打たれたみたいだ。

目の前にはキョロキョロと周りを見回す男が一人。
私は、ひとまずこの身体の火照りを止めるため
目の前の男を利用することにした。

ねえ、あなた
お姉さんとイイコトしない？

娼婦のようによろしく
股間に伸ばした指で水音を立てながら近づいていく。



ああ、ダメだ。

考えがまとまらない。

頭のなかはセックスをすることしか考えられなくなっている。

トップスから胸をはだけける。

人より大きな胸に、男の目は釘付けになった。

私の自尊心が満たされ、わずかに心に余裕が戻る。

300ん

さあ、はやく

獣のように私の身体をむちゃくちゃに
犯し抜いて欲しい。



んああ!

べろっと唇をひとなめし
大きな乳房を乱暴に揉みしだく。
ただそれだけで、絶頂を迎えてしまった。

ずいぶん強力な薬なのだろう。
はやく、熱い肉棒で私の肉穴をかき回してもらわないと
気が狂い死んでしまいそうよ。



男は勢い良く立ち上がりこちらに向かってきた。
その時、私の四肢を何かが捉えた。



なによこれ!

四肢に巻き付く布は強固で
まったく身動きがとれなくなった。

男はまったく気にした封もなく。
いや、むしろ都合がいいとばかりに
私に襲いかかってきた。

力が吸い取られるような感覚。
この布の力が、あるいは目の前の男の力か。

このままでは、身動きがとれないまま
私はなすすべもなく、男に蹂躞されてしまう。

そんなことが頭によぎると
下半身が濡れるのを感じた。

どうして、そんなバカな……。



私の懇願もまったく耳に入っていないのか
男は私の秘所を弄っていく。
くちゅくちゅと水音を聞かされるたびに
ますます私の身体は反応していった。


くぽっ

ぴん
ぷん

ぴん

気持よくさせて、あげるから
ねえ、お願いよ……

ああー
ちよつとまってー
ねえ、この布を外して頂戴！
……んあー



んぐもおおおお!

怒張した肉棒が二気に私の穴を串刺しにする。
すんなりと受け入れられた肉棒は
ありえないほどの大きさで、私の内蔵を
膣内から圧迫してくる。

ズボッ
ニエボッ

ドスドスドス、脳内に子宮にたたきつけられる肉音が響く。
そのたび目の羽目は真っ白にスパークし
気が遠くなつては、また衝撃によって意識を戻される。



目を覚ませば、さっきまでの男とは違う男が私を組み伏せていた。

くっ、これは、一体どこの？
なにが目的で、私をこんなところだ

私の声が聞こえているのかいないのか
男はかまわず私の身体を蹂躪し始めた。



どういふことか、ますます私の身体は

いやらしくなっていた。

乱暴に地面に押し付けられるたび

体の奥が熱く滾ってくる。

ただのマゾヒズムなんてもんじゃない。

乳首は熱く尖り、子宮は疼き

私のすべてが男を求め始める。

くっくっ

早く放さないで、後でひどいことになるわよー

嘘だ。

むしろひどいことをしてほしがる

願っている自分がいる。





んぎい!
ぎやあああ!

あろうことか、男は膣ではなく
尻に入れてきた。
みちみちと肉が裂ける音がする。
腹が避けるような衝撃に
今までにないほど熱く狂いそうになる。

パン
ズッ
ニョホッ
パン



ビュルルル

ぐふ
お、おなが、焼けちゃいそう
ああ、はいつてくる
熱いのが、いっぱい

とまらないザーメンが
腸壁を叩くたびに小さく絶頂を迎える。



ぽあ

とっ...

脳みそがとろとろに溶けたようだった。
尻穴に力が入らず、開きっぱなしになっている。
空気にさらされ、肉に風が当たるとたび
快感の波がやってくる。

ああ、狂ってしまいそうだ。
いや、もう狂っているのかもしれない。



猛烈な便意に、意識がはっきりする。
まずい、このままでは無様な姿を晒してしまう。

しかし、男の腕はますます力を込め
私の身体を拘束する。

ふう、ふう……んぎぎぎ



もう、もどれない。
こんなこと覚えてしまったらわたしは……。

下品な音と悪臭が部屋に満ちる。
しかし、羞恥心よりも、糞が肛門を通る快感に
私の脳みそは焼かれてしまう。

んがあああああああ！

↑ポッ
リ
リ
リ
リ
アピッ



ホトッ

んんん。

ああ、きもちいい
うんこ…きもちいいよお

もう、魔術だとかどうでもいい

もっと、気持よく、なりたい

びん

びん



かは……

身体の自由が効かず、声も出ない。
麻酔を打たれ、意識だけはそのままに
身体の自由を奪われてしまった。

次はなにをするのだろうかと思っていたら
尻にホースをつっこまれ
そこから冷たい水がどんどん送り込まれてきた。

フポポポ



身体の中に固く残った糞が
水の勢いを殺した。

突っかったように、うまく入っていないのに気づいたのか
一人の男がこちらに近づいてくる。

男は拳をおま●こにくっつけると
グリグリと力を込めた。

アッ





男は勢い良く拳を付き入れ、膣内をかき回し始めた。
あちらこちらにと好き勝手に暴れている。

肉壁ごしに子宮側から腸をしごいているみたいだ。
子宮口もガリガリかきむしられ
鈍くなった感覚でも絶望的なまでに快感が押し寄せる。

ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ

そして、ようやく糞をほぐし終えたのか
ホースからの水が二気に入ってきて
腹が妊婦のごとく膨らんできた。



ブポポ

ゴッ

グッ

腸から胃、食道に
体の中ものがどどん逆流してくる。
気持ち悪い。
はずなのに、なぜだろう
すでに何度も絶頂している。

ああ、お腹が苦しい。
おま●こが苦しい。
苦しくて気持ちいい！





回の中に苦味がひろがっていく。

ああ、ダメだ。

意識がなくなってる。

こんなにキモチイイのに

どうして

ねえ

あれからどれくらいの時間が立ったんだろう。
ここは何かの研究所ということがわかった。

ろくな研究ではないのだろうか
私はここでモルモットとして飼われている。

ぐき...苦しです
いらい、いらい、いらい.....

口もおま●こも巨大なチ●ポで塞がれ
首を絞められ、滅茶苦茶にレイプされる。

死を感じる程のプレイほど
私の身体は強く絶頂する。

ああ、最高。
もっと、強く、むちゃくちゃに.....





んはあああああ!!
ザーメンきたあああああ!

んぼお

ん

ずずっ

ドッ

んあああああ!!
ザーメンきたあああああ!!



ああああー

おま●ごおま●ごおま●ごおま●ごおま●ごおま●ごおま●ご

おま●ごだじり注がれちゃってるうー

ドパッ

ゴッ..

ドビュル

きゅんきゅん
んはあ、まじりまじり
破裂するまで
子宮が避けるまで注いでえー





んほ...

んほ...

んほ...

ふんふんきき

んほ...

んほ...

ドグッ

ドグッ

ビュ

ゴッ

ビュ

ドグッ



あはははははー

んー

ねえ、遊んで遊んでえ

かば。

んー

あ
あ
あ

200



そろ、おへの子宮の蓋をはすすの
おもろつきりひびびってー

ああ、内蔵全部引っ張られるの
最高お

2009



心臓が止まる

うわ

うわあー

うわあー

200



どこの黄野郎よ
身体が動かない!

ななっ





パシッ

ヒッ

ヒッ

グア

殺してやるー

出てまがれー



ピク

アハ

ひっ
ちよ...さんなとき



ま、まて、まててー！
あ、ああああー！
と、止まってよおおおおおおー！





くそ、なんなのよ！
力が使えない！
この私が、こんな屈辱的なマネを許すなんて…

グッ
グッ



くそが！
放せ！
殺す！絶対に殺す！

グッ

グググ

トゥン



ふ、この...
この程度の能力！私にかかれば！

キ

キ

キ

この、クスが！
私の口にこんな汚いもの突っ込みやがって！

こんなもの
噛みちぎってやるよ！

ガッ
ガッ
ガッ



な、どうして！
頭に力が入らない！

こ、この壁が原因か？

ちくしょう！

絶対に絶対に絶対に
絶対に絶対に絶対に
絶対に絶対に絶対に
許さない！

ムグ
グイッ







う、くもおおお！
な、なんだこれ
頭が朦朧として……

ジュルルル

あれ？
なにやってるんだっけ？



がはっ

ぐわっ

ぐわっ

ゴブ

ゴブ

ぐわっ



かばっ

身体が上手く動かない上に
能力まで……

くっ
まんまと尻にハマったってやつね

さて、この下衆どもを
どうやって殺してやるのか……

ぐっ

おい、テメーら！
この私にこんな真似して
ただで済むと思っどねーだろっな？

カスどもは私の言葉を聞いても
まったく反応を示さない

どこかの組織の人間か

今なら全殺しは勘弁してやってもいい
とっどこの妙な能力を解きな！

おい、聞いてんのか！

くそっ！能力さえ使えれば
お前らごとき！

……な、なにをする！
おい！こっちに来るな！

や、やめる！
そのおかしなものを近づけるな！

ギョ





くっくっくっく

やめろおー

あ、あつい！
私を汚すなあ！

手に持った謎の液体を私の中に注いでいく。
液体はまるで染みこむように身体の中に浸透していく。
そして、全て注ぎ終わったあと
カスどもはスタンロッドを手にとった。



勢い良くスタンロッドを身体の中に突き入れ
一瞬体が串刺しになったかのような錯覚に襲われた。

あまりの激痛に、意識が消えそうになる。
私の子宮は無事だろうか。
ミンチのように潰された子宮を想像し
吐き気が襲ってくる。

そのカスはあろうことか
スタンロッドを力任せに
私の体内でかき回し始めた。

グッシャア
グッチャ グッチャ

ぐはー！

ぎゃー！
ぐがあー！

てめえ！
こゝろ…おくらー！

内臓を鉄の棒でぐちゃぐちゃ蹂躪される衝撃で
私は死を覚悟した。



カチッ

軽いスイッチとともに
すさまじい衝撃が全身を駆け巡る。


カスはためらいもなく
スタンロッドのスイッチを入れた

身体が電流に反応し
激しく痙攣を起こし
その衝撃で
膣の奥にスタンロッドが
深々とますます突き刺さる。





焦げた肉の匂いが立ち上ってる気がした。
私はまだ生きているのか。
永遠につづくとも思われた地獄は
ようやく終わった。



連れて来られたのはどこかの倉庫だった。
気味の悪い連中が集まっている。
こいつらの目的は何だ？

グァン..

はだかのまま天井に吊るされ
未だ自由に動かない身体を支えながら
連中の目的を考えた。

私個人に対する復讐か、それとも組織への敵対か
どちらにしろ、こいつらには
地獄を見てもらわなければ気が済まない。

ふん...ふん...

もはや何度行われたのかわからない陵辱。
いつまでたつても能力は戻らず
カスどもの性処理ばかりが繰り返された。

絶対に...殺す

もはや、口癖にもなった言葉をこぼす。

グッ
グッ
グッ
グッ



私の心は折れそうになっていた。
戻らぬ力、休まる時のない陵辱。
助けは来ず、生まれた時から続いてきたのかと錯覚しそうになるくらい
記憶のすべてが陵辱に染まっていく。

うぐすつ

うぐすつ……

う……あああ

ドビッ

殺したい——が、死にたいに変わったところ
私はもう逆らう気力もなく
なすがままに汚らわしい物を受け止める肉となっていた。

そうになると、カスどもは退屈なのか
陵辱する時間が少し減った。

このまま、いつか開放される時が来るのか
それとも、このまま朽ちていくのか
もう、なにも考えられなくなっていた。

ひっ
な、なんだこの！

いつものように陵辱をするだけかと思ったら
その日は違っていた。

アッ
ッ
ッ

そいつは大きな両手を私の臍に近づけ、指を一本、二本と
肉をかき分けて挿入してきた。
みりみりと肉が張りちぎれる音が聞こえた気がした。

両手の指を挿入したそいつは、力任せに私の臍を拡張した。



やめろー
やめ、やめてえー

くそー殺すー殺すー
死ねー死ねー
殺してーもう殺してー

ぎぎぎ
ぐぎやあああー

ガッ

カタッ

ギィ
ゴッ
ゴッ

フチフチフチ

肉が引きちぎれる。

ぐちやぐちやぐちや

肉がかき回される。



—あ……

何かが頭のなかでキレた。
子宮に貯めこまれたザーメンが
一気に排出される。

私はこの瞬間死んで生まれ変わった。
人間から、肉奴隷へと……。

ドク

ドク



はひはひはひ……

ザーメンが流れる。
ああ、もったいない……。

ポッパッパ

せっかく、ご主人様たちが注いでくださったのに。
ああ、ごめんなさいごめんなさい。

ああ、おしっこ気持ちいい。

ああ、ごめんなさいごめんなさい。

わるい奴隷におしおきをください。

お好きに使ってください
©2010 株式会社 〇〇〇

グイーン

ク/10
ク/10

ああん、おねがひしますわ
惨めな奴隷に、お情けをください。

ク

ク





ビュッ

んああ！
ふ、ふとい！
きもちいられすうー

ガホッ

らっど、らっど奥に突っ込んだらー
ゆるゆるのガクマンだから
子宮はゆるゆるのらっどはなぞん
すんぞちちちとすー

壁越しにパイプがつかつて
肉壁削れて、おま○ことゲツアナが
ひとつになっちゃいますー

んほおおお！
キタキタキタ！

んによほお！
子宮の中まで
パイプ貫通して
ぐちゃぐちゃかき混ぜられて
きもちいれすう！

ぐいぽん！



うんとケツ穴通るたびに
頭真っ白になって
天国見えちゃうううう！

うひひひひひひ
うんとキター！

排便アクヌきまっっちゃうううう！



GABOTSU
GABOTSU

ご利用をお願いします

んはあ、ハットボトルあたりー
もっと奥に隠りこんでくださいー

ガボツ

ミルク

K-3

収集日 月・水

正正
正正



お...
お...
お...

まだまだ子宮の奥が
あいてますよお
もっとうっとう おつき
がロリを
おねがいします

収集日 月・水

クニ

みる in
クニ

クニ..

クニクニ

クニ

クニ

クニクニ

クニ



ああああああああ
まっア、まっアえー

もっとはげるから!
たくさんはげるから!

いかないで!
めちゃくちゃにしていから!
お腹破裂してもいいから!
し、子宮だけじゃなくて
腸も、胃も、お、おっぱいの中でも
だから、捨てないで!
私は、私を!

月・水

収集日

